OVERtheLORD-千の影を敷く者-《短編・ViVidへ》

kurei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＶＥＲｔｈｅＬＯＲＤ－千の影を敷く者－《短編・ＶｉＶｉｄへ》

【Ｎコード】
Ｎ５７５４Ｊ

【作者名】
ｋｕｒｅｉ

【あらすじ】
Ｍａｇｉｃａｌ　Ｇｉｒｌ　Ｌｙｒｉｃａｌ　ＮＡＮＯＨＡ　Ｔｈｅ　ＭＯＶＩＥ　１ｓｔ放映記念作品！
ＯＶＥＲｔｈｅＬＯＲＤ－千の影を敷く者－の短編となります。
時期的には全篇＆ａｍｐ；外伝終了後のお話で千影がヴィヴィオのパパとしてなのはママとフェイトママと共に暮らしているという設定です。

（前書き）

※作者からのおねがい※
皆様からの感想と評価こそが次の作品への活力です。
読み終われましたら是非とも感想ａｎｄ評価くださいますよう、皆様にお願い申し上げます。

『さようなら、クロノくん。アルフさん――』

海岸沿いに面した公園で1つの別れが行われていた。

それは、魔法なんて知らなかった白い少女の「始まり」の物語。
それは、ただただ母の願いに答えようと必死になっていた黒い少女の「出会い」の物語。
2人は幾度もぶつかり合い、最後には名前を呼び合う友達になれた。

『フェイトちゃん……』

今しばしの別れとなるがいつか逢いに来ると、名前を呼べば助けに来ると、そういってくれた友達は瞳に涙をためながら手を振ってくれる。
その姿に再び涙を浮かべた白い少女は、思い切り手を振って答えた。

黒い少女を中心にして輝く魔方陣は一瞬光を強めて煌く。
そこには既に3人の――黒い少女の姿はなかった。

『――なのは』

いつまでも黒い少女がいたであろう場所を眺める白い少女に、肩に乗ったフェレットが白い少女へと声をかける。
白い少女は髪を潮風になびかせながら、フェレットの声に元気に

頷いた。

『うん！』

この白い少女の頷きと共に、その白い少女が歌う歌と共にエピローグが流れ、最後に黒い少女が歌う主題歌がエンドロールと共に流れて行く。

役者や脚本家に演出家、撮影スタッフ、空戦指導や魔法指導に携わった人たちの名前が流れて行き、スペシャルサンクスとして多大なスポンサー料を払ってくれた会社と、その会社の社長の名前が流れ、最後に監督の名前が映し出された。

エンドロールと共に試写が終わり照明が付けられた劇場は、しばらくの静寂の後、万雷の拍手が巻き起こった。

今日はついに完成したなのはとフェイトの出会いの物語、『ｉｎｎｏｃｅｎｔ　ｓｔａｒｔｅｒ』の試写会が行われていたのだ。

劇場が拍手で包まれる中、この作品のメガホンを取った監督が壇上へと上がる。

監督は席に座る皆に一礼した後、マイクを手に取った。

「まずはここにいる皆さんにお礼を申し上げたいと思います。この作品は我らスタッフや役者の皆さんに止まらず、時空管理局の全面バックアップ、そしてスポンサーとなってくれた企業の方々の力がなければ完成に至ることはありませんでした。特にこの作品の主人公のモデルの１人であり、空戦と魔法の監修を行っていただいた航

空戦技教導隊の高町なのは3等空佐と、総制作費の内3分の2という多大な支援をいただいた『キャメロット』代表取締役社長、千影・アヴァリシア氏には重ねて御礼申し上げます」

この言葉と共に、劇場の皆の視線と拍手が中段に座っていたなのはと千影に注がれる。

方や管理世界でカリスマ的人気を誇る空戦魔導師、方や管理局地上本部とベルカ自治区を中心に広がる魔力を用いない新武装、KMF――千影のナイトセイバーやグラハムの武御雷を元にいくつかの兵装をオミットされて作られた甲冑型戦術兵装――のメーカーを立ち上げ、今や知らぬ人はいないと謳われる『キャメロット』社長。

監督から名前を上げられた2人は、少し照れながら席を立つと皆に頭を下げる。

そんな両親の姿を娘であるヴィヴィオは誇らしげに眺めていたのであった。

試写会と、その後の立食式のパーティを終えた千影、なのは、ヴィヴィオの3人は劇場のロビーへと歩を進めていた。

「なのはママとフェイトママの昔のお話すごかったね。ね、ママ」

「う～ん。ちょっと誇大化されてる部分もあったけど、それは映画っていうエンターテイメントってところかな」

特に最初で最後の本気の勝負のシーンで放たれたスターライトブ

レイカーの威力がアレだったことになのはは苦笑を浮かべる。
アレだけの威力、ブラスターシステムをフルで使ってもとても出せる代物ではないし、アレが現実に使えていれば『聖王のゆりかご』も粉微塵に破壊できたことであろう。
それほどまでに映画では誇大化されていたのであった。

そんな困った感じで苦笑を浮かべるなのはの姿に微笑を浮かべた千影は、この場にいない2人の人物の名前を挙げる。

「フェイトやはやても試写会来れればよかったんだけどね」
「フェイトちゃんは次元航行勤務中だし、はやてちゃんは今追ってる事件の詰めの捜査だから」

残念そうに話すなのはの声に、ヴィヴィオもなのはの友人である1人の名前を挙げた。

「ユーノ先生も呼ばれてたけど、無限書庫のお仕事忙しくて来れなかったみたいなの」
「だからユーノ君の変わりに試写会に出席したんだよね、ヴィヴィオ司書」
「えっへん！　そうなのです」

ヴィヴィオが胸を張り、その光景に微笑ましい笑みを千影となのはが浮かべる中、なのはは時計の針を確認すると、1つ頷いた。

「さて、私はこれから本局の方で来月から始まる大規模演習の打ち合わせがあるから」
「わかってる。大変だね3等空佐殿にしてエースオブエース殿は」

千影の言葉に、なのははため息をつく。

「だよねぇ。今を時めくＫＭＦメーカー『キャメロット』の社長さんより大変なんだから」

なのはの言葉通り、年々業績を伸ばし大きくなる『キャメロット』の社長である千影であったが、その生活はかなり余裕を持ったものであった。

決算の時や新製品の発表及び納品時期ともなればそれなりに忙しいが、ほとんどの日の仕事を定時に済ましており、尚且つ本社の方に出向くよりも自宅で仕事をすることの方が多いのが現状で、ヴィヴィオの授業参観や進路懇談会などに主に出席しているのは他ならぬ千影でもあったのだ。

「ウチは向こうとこっちで優秀な人たちを集めたからね。まぁ多少性格に難はあるけど、ウォルフガングさんやロイドさんをはじめ基本的に皆いい人たちばかりだし」

千影の挙げた名前になのはは苦い顔となった。

「……さすがにあの人たちは管理局には無理だなぁ」

教導隊でＫＭＦを試験評価する折、説明のために会ったことがあるのだが、とても管理局で働けるような人たちではなかったからだ。主に性格的に。

「まぁ、ここが民間企業と公的機関の違いってヤツかな。それにウチの副社長も頑張ってくれてるし」

千影のネクロノミコン機械言語新訳版の精霊になってくれたアギトであったが、今は副社長の座に座り、あれこれと千影を補佐する

立場にいた。
今日も今日とて、こちらに出席せねばならなかった千影の変わりに本社にて開発中の第８世代ＫＭＦの進捗情報を開発陣より聞いていたのだ。
外に待たせた車を前にしたなのはに、ヴィヴィオは手を振る。
「ママ、いってらっしゃい」
「はい、いってきます。帰りはかなり遅くなると思うからパパと一緒にお留守番よろしくね」
「うん！」
なのはに頭をなでられたヴィヴィオは元気よく返事を返したのであった。

なのはを乗せた車が遠のいて行く中、ヴィヴィオは千影に顔を向ける。
「ねぇ、パパ」
「何かな、ヴィヴィオ？」
「ヴィヴィオにも、なのはママとフェイトママのようなライバルだけど強い絆で結ばれた友達ってできるかな？」
仲のいい友達はいるが、なのはとフェイトのように好敵手でもあるといえばそうでもなかった。

幼いながらに映画に触発されたのだろう。
大好きなママ２人と同じような関係の友達が少し欲しくなってきたヴィヴィオなのであった。

そんなヴィヴィオに千影は悪戯っぽい笑みを向ける。

「どうだろうねぇ、流石になのはとフェイトの出会いは些か特殊だから。ヴィヴィオが望むなら私の『這い寄る混沌』の力でそういう未来を紡いであげてもいいけど？」

この千影の言葉にヴィヴィオは両手を激しく横へとふった。

「ああっ！　違うのぉ！　ヴィヴィオのためにパパの神様の力を使っちゃダメェ！！」

激しく手を振るヴィヴィオに、千影は「クスクス」と笑みを漏らすと、少々笑いすぎて目じりに浮かんだ涙を拭った。

「冗談だよ。それに心配しなくてもそう遠くない未来にめぐり合えると思うから」
「本当？」
「今の段階では予感でしかないんだけど、ヴィヴィオがヴィヴィオの物語を紡ぐときが来る……これだけは確実に言えるから」

まるで予言のように語られた千影の言葉に、ヴィヴィオはしみじみと頷く。

「そっかぁ……パパがいうならそうかも」

この４ヵ月後、ヴィヴィオが４年生に上がるとき千影の予言が的

中することになる。
ベルカの覇王と聖王、その物語はヴィヴィオを中心に紡がれる物語。

「さてと、今日は1日アギトに仕事を任せてきたから家でゆっくりしようか」

しかし、その物語はここで語るべきものではない。

「うん！」

ヴィヴィオの物語、それが語られる場所は――――

It continues to vivid.

（後書き）

Ｍａｇｉｃａｌ　Ｇｉｒｌ　Ｌｙｒｉｃａｌ　ＮＡＮＯＨＡ　Ｔｈｅ　ＭＯＶＩＥ　１ｓｔの放映を記念して書かせていただきました。
Ｃ７６で販売されたドラマＣＤではミッドチルダで製作されているというマクロスＦでのマクロスゼロのような位置づけでしたので、こう言う作品もありかなと思い書かせていただきました。
なのはの映画は今年最大にして最高の作品ですので皆さんも是非映画見に行ってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5754j/

OVERtheLORD-千の影を敷く者-《短編・ViVidへ》

2010年10月8日23時04分発行